


 書評

アルコール・薬物関連障害の診断・治療研究会(白倉克之, 樋口進, 和田清)編

アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン

福居顯二

「アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン」が上梓された。これはわが国のこの領域の第一線で活躍する専門医が集まって厚生科学研究班(アルコール・薬物依存症の病態と治療に関する研究班;平成 10~12 年)を構成し,その研究の成果を広く共有するために,「アルコール・薬物関連障害の診断・治療研究会」として分担執筆され市販に至ったものである。

近年日本で用いられているアルコール・薬物依存症の診断基準は,施設や臨床の経験年数などによりさまざまである。比較的若い世代は ICD-10, DSM-IV をもっぱら使い,さらに最近では APA(米国精神医学会)治療ガイドラインシリーズを監訳した「物質使用障害—アルコール,コカインとオピオイド」も参考にされる。これにより米国の現状は理解できるが,副題にもあるようにアルコール以外にはコカイン,オピオイドに関する記載のみである。日本の薬物依存情報研究班の調査でも明らかなように,わが国で治療の上位を占める覚せい剤,有機溶剤,抗不安薬については触れていない。また比較的臨床経験の長い医師は ICD, DSM などの操作的診断以外に以前からある「アルコール精神疾患の診断基準;厚生省アルコール中毒診断会議報告,1979」や「覚せい剤中毒者の診断基準;公衆衛生審議会,1982」を参考にする傾向もあった。

こういったなか,日本の実状にあった,わかりやすく使いやすい,アルコール・薬物関連障害についての診断・治療ガイドラインが臨床医の中で求められていた。そういった意味で本書が上梓されたことは時を得たものである。本書は総論 6 章(診断総論,治療総論,薬物療法総

論,心理社会的治療,治療環境と治療選択,通報義務)と各論 4 章(アルコール,覚せい剤,有機溶剤,ベンゾジアゼピン)に分かれている。

目に付いたところを挙げると,総論では依存と乱用の概念が ICD と DSM を比較してわかりやすく記載され,ICD による下位分類についてもスペースをとって解説されている。心理社会的治療では現在用いられている種々の治療法を網羅し,その特徴が記され,治療環境では法的規制モデル・医療モデル・社会福祉モデルの考えが紹介されている。各論では,アルコールのほかに前述した日本で乱用頻度の高い 3 種類の依存性薬物を取り上げたことは大変実践的である。それぞれ診断・治療についての変遷と現状・今後の課題についても詳しく解説されている。専門用語も必要に応じて説明が盛り込まれており,精神科以外の他診療科の医師やコメディカルにも読みやすいものとなっている。さらに違法薬物関連精神障害者に関する通報義務の手続きや KAST をはじめとするアルコール依存症の質問紙表や自助グループの連絡先なども掲載され親切である。

アルコール・薬物関連障害については広く医療・福祉現場でかかわることを考えるとき,専門職種にとっては改めて知識の整理・治療の実践に役立つし,この領域の勉強を始めようとする臨床医・研修医にはまたとない入門書となる。広く読まれることを期待し,ひいてはわが国のアルコール・薬物関連障害に関心を持つ医療従事者の裾野が広がることを願うものである。

(京都府立医科大学大学院精神機能病態学)

● B5 237頁 2003 本体3,500円 じほう刊